

発行  
 北海道ポーランド文化協会  
 〒001-0032  
 札幌市北区北32条  
 西5丁目2-32-902  
 佐光方  
 電話・FAX  
 011-790-8610

# POLE

第78号 2013.5.10  
 北海道ポーランド文化協会会誌

北海道ポーランド  
 文化協会  
 創立25周年!

Happy 25<sup>th</sup> Anniversary!



ポーランド広報文化センター  
 支援事業

第65回例会



Poland Film Selection III

6月8日(土)、9日(日)  
 札幌プラザ2・5  
(旧東宝プラザ) 狸小路5丁目

## ポーランド映画

セレクションⅢ 開催にあたって

実行委員長 佐光 伸一

6月8日(土)、9日(日)の日程で、「ポーランド映画セレクションⅢ」が開催される。普段はなかなかご覧いただけないポーランド映画の名作・新作を札幌市民に見ていただくという企画は、今年で3回目になる。毎回延べ観客数 500人から600人を集め、日本全土でも、例を見ない大規模なポーランド文化を紹介するイベントとなっている。

世界を驚かせたドキュメンタリーの  
 問題作、札幌初上映・両監督来場!

マチェイ・ドルィガス監督/ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督



講演会+作品上映  
 『統合失調症』  
 『私の叫びを聞け』



この映画祭の大きな特徴として、毎回ポーランドの映画人をゲストとして招聘していることが挙げられる。昨年『コヴァルスキー家の歴史』という作品をもって来たゴウエンビェフスキ監督は、札幌でのポーランド映画祭の様子を撮影し、帰国後は、ポーランド国内のマスコミで大きく取り上げられた。

このようにポーランド映画界と札幌市民が直接つながる機会を提供していることが、この映画祭の存在価値だと自負しているが、今年もまた、素晴らしいゲストが札幌にやって来る。

ポーランドのドキュメンタリー映画界を代表する映画作家マチェイ・ドルィガス監督、そしてその妻でリアニアの映像作家ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督

である。EU加盟諸国が自国を代表する映像作品を一堂に集めて上映するEUフィルムデイズが6月に東京で開催され、ドルィガス監督の作品『他人の手紙』(2010)がポーランド代表作に選ばれたのに合わせて監督夫妻が来日することになり、ちょうどわれわれの映画祭と日程が近いことから、ぜひ札幌まで足を延ばし、作品を紹介して欲しいと依頼したところ、快諾してくれた。

今回も、上映後、監督とのディスカッションの場を設けている。お二人とも映画大学で教員を務めているので、きっと面白い話をたくさん聞かせてくれると思う。ぜひ映画を見た疑問や感想をご本人にぶつけて欲しい。

————— 詳細は同封のフライヤーをご参照ください。 —————

=写真上から= ①→1日目 ②→2日目

『統合失調症』 ①14:20

『私の叫びを聞け』 ①15:20

『沈黙の声』 ①17:30 ②11:30 『エロイカ』 ①10:00 ②15:30 『愛される方法』 ①12:00 ②13:30

『サラゴサの写本』 ②17:30

『夏の終わりの日』 ①19:30 ②10:00

<会員用>招待券1枚同封しています。



## 素材を「映像詩」へとまとめ上げていく、

### — ドルィガス監督 —



『私の叫びを聞け』

1991 年 / 46 分 ドキュメンタリー

ドルィガス監督は今回、『他人の手紙』と、監督デビュー作である『私の叫びを聞け』(1991 年)の 2 本を携え来日した。札幌では、『私の叫びを聞け』を上映することにした。彼が国際的な名声を確立することになった代表作であり、映像作家としての彼の個性がもっともよく表れているからである。

『私の叫びを聞け』は、1968 年のポーランドの収穫祭で起こったある事件を題材にしている。当時のアーカイブ映像を見ていたドルィガスは、スタジアムの観客席で人が炎に包まれ、周りの観客がその炎を上着で消そうとしているという異常な光景を発見する。この事件に関する記録はどこにも残されていない。後に分かったのは、リシャルド・シヴィエツという地方出身の会計士の男が、全体主義と世界を支配する嘘に抗議するため、自らにガソリンをかけ、焼身自殺したという事実であった。

歴史の闇に葬られた事件の真相を解明するため、彼は関係者へとインタビューを試みる。彼の妻、今は成人している 5 人の子供たち、友人、そして事件の目撃者の証言を積み重ねていく。そこで現れたのは、何かのイデオロギーの狂信的な信者などではなく、知的で家族を愛するごく普通の男の姿だった。

1968 年というと、ソ連軍が当時のチェコスロヴァキアに軍事介入した「プラハの春」事件や、世界で相次いだ学生運動など、大激動の年であった。歴史に造詣の深かった彼は、抗議行動の必然性を強烈に感じ、焼身自殺へとつながっていく。20 世紀の東欧の歴史では、1969 年ソ連の軍事介入に抗議してプラハのヴァーツラフ広場で自殺したチェコの大学生ヤン・パラブの名が知られている。

彼は、宗教改革のマルチン・ルターと並ぶチェコの英雄として歴史に記憶されている。一方、その

パラブの死の前の年に同じような行為を行ったシヴィエツは、ドルィガス監督がこの作品を製作しなければ、われわれは知る由もなかった。「私が映画を製作することにより、彼の死を無駄にはしなくなかった」とインタビューの中で彼は語っている。

しかし彼は当時の事件の関係者を糾弾する歴史の裁判官のような態度とは無縁である。関係者のインタビュー映像を通し、観客がその事件の意味を自ら考察するよう仕向けていく。ラジオ中継を行っていたアナウンサー、事件を目撃した若い女性、彼らの言葉からは、権力の悪を告発する態度、あるいはその時の自分自身の行為を正当化するといった、一義的なメッセージは聞こえてこない。異常な事件を目撃した時の無力感、当時の記憶に関するとまどいなどが、誠実なことばで語られる。ドルィガス監督は社会問題、歴史事件をテーマとしながら、そこに必ず人間の内面の声を響かせる。アーカイブ映像のモンタージュ、効果的な音楽の使用、関係者のコメントの配置など、卓越した手腕により素材を「映像詩」へとまとめ上げていく。彼の作品に一度触れると、「ポーランドドキュメンタリー派」を代表し、国際的に高い評価を受けるのも容易に理解される。

#### マチェイ・ドルィガス監督



1956 年、ポーランドのウッチに生まれる。1981 年全ロシア映画大学を卒業。クシシュトフ・キェシロフスキの助手を務める。現在はウッチ国立映画大学で講師も務める。代表作『私の叫びを聞け』

(1991)、『他人の手紙』(2010)など。

ゲストのトーク & ドキュメンタリー作品  
の上映は<第 1 日目>のみです！

6 月 8 日(土)午後 2 時

ご参集ください

14:00~14:20	監督挨拶
14:20~15:18	『統合失調症』上映
15:20~16:06	『私の叫びを聞け』上映
16:30~17:10	監督夫妻のトーク



今回、ドルイガ  
ス監督とともに来  
札するジェラケヴ  
ィチュテ監督の  
作品からは『統  
合失調症』(2001)を選んだ。

社会主義時代、ソ連では、権力に逆らう政治犯を「統合失調症」と見なし、矯正施設に送っていた。当時、実際に施設に収容されていた人物、そしてその施設で働いていた医師や看護婦のインタビューを通してこの施設の実態に迫るとともに、このようなシステムが生まれることになった背景を考察する。夫妻はお互いの作品にスタッフとして加わっていることから明らかなように、作品にはテーマ的に響き合うものが多い。しかし、作風は異なり、ジェラケヴィチュテ監督は、音楽やモンタージュの利用は控えめで、素材そのものに語らせる。粛々と事実を積み上げていく手法を通して、歴史に対する彼女の誠実さが伝わってくる佳作となっている。

## 歴史に対する誠実さが伝わってくる

— ジェラケヴィチュテ監督 —



『統合失調症』

2001年 / 58分 ドキュメンタリー

ウィタ・ジェラケヴィチュテ監督  
1959年、リトアニアのカウナスに生まれる。全ロシア映画大学、ウッチ国立大学を卒業。代表作に『統合失調症』(2001)、『壁の向こう』(2007)。

## ズバリ見所はココ！

自信を持ってオススメする貴重なポーランド作品群。是非ご堪能ください。

また、今回の映画祭では、昨年、東京で開催された『ポーランド映画祭 2012』で公開された 20 本のポーランド映画史に残る名作から、さらに選りすぐった 5 本をご覧いただく。アンジェイ・ワイダの『地下水道』や『灰とダイヤモンド』のような有名作品はあえて外し、見る機会の少ない作品を選ぶことにした。その中では一番よく知られているのが『パサジェルカ』で有名な鬼才アンジェイ・ムンク監督の『エロイカ』だろう。『地下水道』と同じ第 2 次世界大戦末期のワルシャワ蜂起を扱いながら、まったく異なるアプローチをしている。「英雄交響曲」という副題を持ち、2 部構成となっている。前半は、酒好き女好きのどうしようもないお調子者がすんでのところで、歴史の英雄になりそうになるという物語をドタバタコメディタッチで描いている。後半は一転し、強制収用所から脱走したことになっている英雄が実は屋根裏部屋に隠れていて、今さら出るに切れなくなったという悲喜劇をペースたっぷりに描いている。ワイダの愛国的ロマン主義とは

まったく違った作風で、ポーランドの歴史ものの懐の広さを感じさせる。

さらに、今回の一番の野心的な上映は『サラゴサの写本』である。幻想文学ファンの間でカルト的人気を誇るヤン・ポトツキの幻想小説『サラゴサ手稿』を映像化した作品である。ルイス・ブニュエルやデヴィット・リンチなどが絶賛した作品としても知られる。千夜一夜物語風のストーリーがいくつも重層的に重なり合う、知的で刺激的な作品である。いったん作品の中に入り込めば、3 時間超はあっという間に過ぎてしまうような怪作である。

他にも、戦争で傷ついた男女の浜辺での 1 日を美しい映像で描いた『夏の終わりの日』、ナチスに抵抗する男性を愛した女性を描いたメロドラマの佳作『愛される方法』、巨匠カジミェシュ・クツツ監督の幻の傑作『沈黙の声』どれも見逃せない作品ばかりである。ポーランド映画のクラシックの世界にたっぷり浸っていただきたい。



日本の国内便の飛行機は現在では、沢山の便がほぼ満席で、東西南北を飛んでいる。さて、その飛行機の座席番号に「4」の座席が無い事を覚えている人は何人いるだろう。今度、乗るときは是非確かめて見てください。ついでに「9」(苦)も。

日本民族は太古より、「4」は「死」と同音で発音する為、忌み嫌ったのである。同じ事が「詩」についてもいえる。「詩」と「死」である。唐木順三の著書のタイトルに「詩」と「死」という名著がある。

この国では、「詩」といふものは、書店を見ても、文芸誌を見ても、片隅に押しやられている。乱暴な言葉を使えば、あっても、なくても良い「モノ」という印象さえ受ける。

ポーランドでの留學生活で、その考えがまちがっていた事を深く気づかされた。ポーランド人にと

っては「詩」というものは「パン」と同じくらい「聖書」と同格の、人間にとって一番、スバラシイ芸術という認識がある。「詩」に対しての「尊厳」、「敬意」の気持ちを持っていることを強く感じた。ポーランド文化の最上位の芸術が「詩」である。

松明のごと、なれの身より火花の飛び散るとき／なれ知らずや、わが身をこがしつつ自由の身となれるを／持てるものは失わるべきさだめにあるを／残るはただ灰とあらしのごと深淵に落ちゆく昏迷のみなるを／永遠の勝利のあかつきに、灰の底ふかく／さんぜんたるダイヤモンドの残らんことを・・・  
—ノルビット作「舞台裏にて」—

さて、「午後のポエジア」の例会ですが、希望する者は誰でも、参加出演できます。ポーランドに関係したモノ。ポーランド人と日本人の合作で作っています。今年は歌や踊りも、披露されます。乞、ご期待！

(しもだ・ちよまる) 副会長

午後のひとときを一緒に！  
紅茶 ケーキ 朗読 音楽



すべて入場無料

主催 / 北海道ポーランド文化協会

後援 / 駐日ポーランド共和国大使館・ポーランド広報文化センター・札幌市・札幌市教育委員会

交通 / 北海道大学クラーク会館 北区北8西5 地下鉄札幌駅から徒歩5分

お問合せ先 / TEL/FAX:011-790-8610 (事務局)

お申込み・予約不要。直接会場へお越し下さい！





## マリア・マグダレナ・カチヨルさんの日誌

Maria Magdalena Kaczor's Diary

昨年9月に Kitara 第15代専属オルガニスト就任。その豊穡な響きは深く強く多くの聴衆の心をゆさぶります。5月9日東京芸術劇場「ランチタイム・パイプオルガンコンサート」、12日大森めぐみ教会「BACHプラス オルガンコンサート」、札幌では6月6日「オルガンサマーナイトコンサート」、14日「オルガンによる教会音楽の夕べ」、さらに東京で7月11日「サントリーホール オルガンプロムナードコンサート」が企画されています。

### オルガンサマーナイト コンサート

～ワンコインで楽しむコンサート

オルガンとヴァイオリンの音色に包まれる初夏の夜～

6月6日(木) 19:00 開演/18:30 開場  
札幌コンサートホール Kitara 全席指定 500円

- ・ブラームス: 11のコーラル前奏曲 作品122より
  - ・ヴィヴァルディ: ヴァイオリン協奏曲集《和声と創意の試み》  
作品8より(四季)ト短調「夏」作品8-2 RV315
  - ・アルビノーニ: アダージョト短調 他
- Kitara チケットセンター ☎ 011-520-1234

<http://www.kitara-sapporo.or.jp/event/?p=30224>

### カチヨルさんのプロフィール

1980年ポーランド生まれ。ミェチスワフ・カルウォーヴィチ高等音楽学校、イグナツィ・ヤン・パデレフスキ国立音楽アカデミーで学び、05年からフランスのガブリエル・フォーレ音楽院のフランソワーズ・ドルニエのオルガンクラスで研鑽を積み、08年にパリ地方音楽院でオルガンのディプロマ取得。

同年、リヨン国立高等音楽院のフランソワ・エスピナス及びリーズベット・シュルンベルジェのオルガンクラスに入学、12年6月卒業。

07年、アンドレ・マルシャル国際オルガンコンクールでファイナリストとなり審査員特別賞受賞。

11年にヘルマン・シュレーダー国際オルガンコンクールで1位なしの2位。ポーランド、フランス、リトアニア、イタリアの音楽祭に定期的に出演。

12年9月、第15代札幌コンサートホール専属オルガニストに就任。

### オルガンによる教会音楽の夕べ

6月14日(金) 開演 18:30～ 札幌北一条教会(中央区北1西13) 入場料: 1000円

M.レーガー: イントロダクションとパッサカリア ニ短調  
F.メンデルスゾーン: オルガン・ソナタ第6番 Op.65-6 他  
お問い合わせ ☎ 011-221-4455 (北一条教会内)

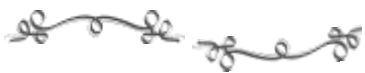
<http://www.geocities.jp/kita1jo/02img/130614kaczor> ご参照ください。

カチヨルさんの「トッカータとフーガ ニ短調 BWV565」の演奏が動画でご覧いただけます。

- ◆ 「北海道ポーランド文化協会」公式ホームページより
- ◆ カチヨルさんのホームページ <http://www.mariamagdalenakaczor.eu/index.html>
- ◆ YouTube から [http://www.youtube.com/watch?v=0Xz\\_2hnz\\_-4&list=UUjXRtuUzBU88L1QYiG2z6XA&index=1](http://www.youtube.com/watch?v=0Xz_2hnz_-4&list=UUjXRtuUzBU88L1QYiG2z6XA&index=1)
- ◆ 大使館の文化活動、映画や演奏活動の様子について「ポーランド広報文化センター」から↓  
カチヨルさんのCDは、7月6日(土) 発売予定! <http://instytut-polski.org/>  
※任期を終える今夏に「カチヨルさん さよならコンサート」(仮題) 企画中! 12頁ご参照ください。



## 第63回例会 報告



Happy 25<sup>th</sup> Anniversary !



レクチャー・コンサート

# 21世紀のショパン像

～新書簡集出版を祝って～

ポーランドで刊行が開始された新編集の書簡全集の日本語版が出版されたことを記念して、昨年11月17日（土）に北海道大学情報教育館 スタジオ型多目的中講義室にて北海道ポーランド文化協会第63回例会レクチャー・コンサートを行いました。

安田 文子

ショパンの命日が10月17日であること、そして北海道ポーランド文化協会の元副会長で、日本におけるショパンのピアノ教育の草分けであり私の恩師でもある遠藤道子先生が11月24日に亡くなられて、その約1年後ということで追悼の意味を込めて2012年11月17日に行うことにしたのです。

音楽評論家、ショパン研究の第一人者である三浦洋先生がお話しをされ、そのお話にちなんだショパンの曲を坂田朋優さんと高橋健一郎さん、そして私の3人で演奏しました。

新書簡集はポーランド語原文から訳された初めての日本語版で、まさに700ページを越し、ショパンをとりまく人物、生活環境、政治的・社会的・文化的背景に関する詳細な注釈がぎっしりと書き込まれていて、その内容の充実ぶりには驚くばかりです。

[第1部]のテーマは、21世紀のショパン像

～全書簡集新訳の意義について。正しい表記への修正や、ショパンが書いた「シャファルニヤ通信」に関する新たな解釈について～

今まであったシンドフ版やヘドリー版は、正確に記されているものもなければ、量も十分ではありませんでした。新書簡集では完全に厳密な校訂のもとに、ポーランド語から日本語に直接翻訳されていて、ようやく本来の意味でのショパン像が気付かれるきっかけになるとご説明されました。

また新書簡集では、ポーランド語の発音に忠実にカタカナ表記されています。「マズルカ」を「マズレ

ク」にですとか、ショパンが書いたところだけ「ミツキエヴィチ」が「ミチキエヴィチ」となっています。これは間違いではなく、ミツキエヴィチの故郷のリトアニアのノヴォグルデク地方ではこう綴るのだそうです。

ショパンは少年時代、ポーランド北部のシャファルニヤ村で夏休みを過ごしましたが、ワルシャワにいる両親にシャファルニヤ通信という題名を付けて新聞風の手紙を送っています。その紙面は国内ニュースと国外ニュースに分けられていますが、ポーランド三分割の結果、実際にシャファルニヤ村の近くをロシア領とプロイセン領の国境線が走っていて、ショパンもこの国境線を越えて往来していたことに関連しているのだそうです。

私は留学中、シャファルニヤ村に行ったことがありますが、のどかな田園風景が広がっていて、土着的というか土の匂いがするという風情でした。ホテルもないので農家のお宅に泊めてもらい、朝はたくさんのニワトリの鳴き声で起きたことが印象に残っています。多分ショパンが過ごした時の村の様子とほとんど変わらなかったのではと思います。

そして坂田朋優さん=写真次ページ左上=が、マズルカ 第13番イ短調 Op.17-4、ワルツ第13番変ニ長調 Op.70-3、ポロネーズ ト短調を非常に美しく、かつ知的に弾いて下さいました。





〔第2部〕はイタリアの影というタイトルで、ショパンがイタリアの文化から受けた影響についてです。

～ショパンが近代教育で受けた多文化的な影響。コンスタンチアのこと、ショパンの教師同士の確執、「芸術」という言葉とショパンの関係についてなど～

ショパンは学生時代イタリア語を勉強していて、手紙の中でも時々冗談のように使っていてイタリア語との結びつきは濃かったようです。当時の19世紀前半のヨーロッパで流行していたロッシーニやベリーニのオペラが、ショパンの1番お気に入りの音楽でした。それがショパンの作曲技法に多大な影響を与えています。ベルカント唱法とかコロラトゥーラ唱法というオペラの歌い方をそのままピアノ音楽のメロディーに取りいれています。コロラトゥーラ唱法を思わせる美しいメロディーでできているノクターン第2番変ホ長調 Op.9-2 とうっとりするような息の長い美しいメロディーでオペラの類似性を指摘されているピアノ協奏曲第2番へ短調 Op.21 第2楽章（ピアノ独奏版）を弾かさせていただきました。=写真下=

ピアノ協奏曲第2番は、1996年に札幌でポーランド国立放送交響楽団と初めて弾きました。遠藤道子先生に「大変な曲だけど、がんばりなさい」と励ましていただいたことを思い出します。今回はピアノ独奏版でオーケストラの部分もピアノで弾きます。いろいろな方の編曲があったのですが、オーケストラの雰囲気がよくでているアール・ワイルド版を選びました。今度はナショナルエディションで弾いてみたいと思っています。



〔第3部〕は バラードの誕生について。

～ミツキエヴィチやヴィトフィツキなどポーランドの詩人たちがショパンに与えた影響。バラード第1番が、その後のショパンの作品に与えた影響を考える～

音楽の歴史上バラードという分野を初めて作った

のはショパンで、どうして文学のジャンルに音楽を持ってこようとしたかという疑問に、新書簡集が多くのヒントを与えてくれています。

まず歴史的背景に原因があり、18世紀の後半、ヨーロッパで民族主義運動が起こって自分たちの民族の文化のバラードを復活させようという動きがあり、ちょうどショパンの時代の1820年代のポーランドにもバラードブームがあり、ミツキエヴィチとヴィトフィツキの2人の優れたバラードの詩人がポーランドにもいました。特にポーランド最大の詩人ミツキエヴィチはショパンとの関わりが深く、ショパンはミツキエヴィチについて、1827年1月8日と3月12日の友人宛の手紙で書いています。バラード1番と同じころに作ったポロネーズ第1番、ノクターン第7番は作風、音楽の作り方がバラードに似ていて叙事的で物語を感じさせる作品になっています。バラード1番は、「幻想曲」などのその後の作品にも影響を与えていくのです。



そして高橋健一郎さん=写真右上=がバラード第1番短調 Op.23 を力強く、かつ美しく弾いてくださいました。バラードはポロネーズやマズルカでもないのにポーランド民族的な感じがするというのが印象的でした。やはりショパンの音楽の一番の根幹にあるのはポーランドなのだと思います。

三浦先生=写真下=が編集者のスコヴロン先生に尋ねたところ、第2巻は2013年末、第3巻は2020年に予定されているそうです。ショパンのナショナルエディション、いわゆるエキエル版が出版されたときも、ショパンの研究の進歩に驚いたものですが、ますますショパンの実像を知ることができることに期待



は膨らむばかりです。三浦先生のショパンの深い理解と洞察力に裏付けられた、

機知に富んだお話をもっと聴いていたかったです。またぜひ次の機会を待ちたいと思います。

(やすだ・あやこ)運営委員



—— 2012コルチャック年 特別記念企画 ——  
**コルチャック先生の遺してくれたもの**  
 講演／展示会／映像上映／新刊書籍紹介  
**講演 ◆ “子どもの発見と教育改革”**

**皆様へのご報告とお礼**

コルチャック年 2012 札幌イベント開催、  
 無事終了とその後について



塚本先生の解説付き、パネル会場風景  
 熱心に耳を傾ける参加者たち

昨年 2012 年はポーランド政府・国会が制定したコルチャック年にあたり、日本では札幌と東京で開催した記念行事にそれぞれ 120 名前後、会員の皆様をはじめ多く方のご参加・ご協力をいただきましたことを、改めてお礼申し上げます。

塚本 智宏



充実したパネル展に感嘆の声も

11 月 20 日、札幌では、W.タイスワルシャワ大学教授の講演(佐光さんの通訳)、映画『コルチャック先生』の上映、コルチャックの子どもへの権利思想に関する展示、塚本のコルチャック先生の「最後の行進」に関する小講演、という具合で今から考えれば欲張りな企画で、とくに展示はその準備などには協会のみなさまの応援があつてようやく実現に至りました。映画・講演・展示などそれぞれにご感想・ご意見などたくさんありそうでしたが現状でなお把握しておらず、今後のためにも何かお声をお寄せいただけるとさいわいです。



講演するタイス教授

翌々日は東京、ポーランド大使館で同様に講演\*と展示などがありました。会場は埼玉大学の小田倉いずみ先生(コルチャック研究者)の大学学生のボランティアの応援のもと、ビデオ上映企画で同先生がイスラエルから持ち帰ったコルチャック先生の教え子(高齢)の方の「コルチャック先生」についてのお話も興味深かったです。私は簡単な報告をさせていただいた他、展示の写真を見ながらポーランド大使にコルチャックとはどのような人物だったのかをお話する機会に恵まれました。そのほか、講演終了後タイス先生やコルチャック協会関係者が当日参加者とお茶菓子を介しながらの懇親会も有益でした。様々な婦人団体や教会、また人権団体の方などと現在の子どもたちや福祉の問題などに関連したお話で勉強の機会となりました。



(左から) タイス教授、通訳の佐光事務局長  
 握手するの霜田副会長



\* なお、タイス先生のご講演については、東京での講演を塚本が勤務する大学の紀要に記録として残しましたので入手されたい方はご連絡ください。紀要の抜き刷りをさしあげます。

(講演記録: W. タイスワルシャワ大学教授「子どもは人間 —コルチャックの教育遺産—」の紹介によせて、東海大学国際文化学部紀要第5号)

さて、国内でのイベントの後、世界各地のコルチャック年行事のいわば締めくくりとして、12月4・5・6日ワルシャワにて国際会議が開催され、参加してまいりました。関連イベントとして簡単にご報告いたします。

この会議の主催者はポーランド政府子どもの権利オンブズマンで、現在その長官は若く42歳のマレク・ミハラック氏(タイス先生のパートナーバルバラ・タイス先生の教え子)です。▼4日は、旧大統領官邸の比較的小さな講堂のようなところで80名くらいの国内外の研究者が集まり、「子どもの尊重される権利—21世紀の挑戦」と題して、朝から晩まで報告が続きました。塚本は日本の子どもの(権利)状況とコルチャック思想に注目する理由というような内容で報告。参加者のなかにはずっとコルチャックに関心を持ち続けているヨーロッパ人権委員会代表のトーマス・ハンマーベリイ氏もおり、日本の教育問題にも耳を傾けていただきました。

▼5日は、ポーランド国内の子どもを擁護・保護するためのNGO諸組織の報告、コルチャックに関する新作オペラ公演や記念式典に参加。そこではシュピルマン夫人にもお会いしました。▼6日は、世界のコルチャック協会の代表が開設200周年となったクロフマルナ孤児院の記念施設が新装オープンとなり、そこで意見交換・交流が行われるとのことでした(この日は不参加)。

ポーランドでは2012年コルチャック年を記念して、ポスターコンテスト(テーマ「そこにいるのは子どもではない。人間だ。」)が行われていたようです。そのポスターの受賞作で公式ポスター、子どもの手と大人の手をあわせたポスター=写真右=がとても気に入りました。

報告の最後に掲載させていただきます。

“Dziecko to człowiek”

(つかもと・ちひろ) 運営委員



コルチャック先生と子どもたち(1930年頃)



東京会場でも大きな関心を集めた



2012年コルチャック年記念ポスターコンテスト受賞作

第64回  
例会報告

## ジャズ de ポランスキー



## ポーランドが生んだ鬼才「ロマン・ポランスキー」の傑作短編映画 &amp; ジャズ

Sza/Za (シャ/ザ) (パヴェウ・シャムブルスキとパトリック・ザクロツキ) は、1999年以來、ワルシャワの音楽シーンとインディーズ系芸術メディアで活躍する、音楽家、即興演奏家、文化情報発信者だ。映画上映のために、コメダの作品にインスピレーションを受け、オリジナルの音楽サウンドトラックを作った。

## 冒険の価値 + 赤字 = 大満足

実行委員長 佐光 伸一



「無声映画に合わせて即興で音楽をつけるジャズグループ「シャザ」のコンサートを、札幌でもやりませんかとポーランド広報文化センターから打診されたのが8月。初めは不可能と思ったイベントも、映サと北大ジャズ研、そしてアーティストの宿を提供してくれた知人などの協力で、急きょ実現することとなった。

一番大きなハードルは音響機材だった。会場は映画館であってライブハウスではない。アーティスト側から届いた詳細な機材リストはアンプの種類だけでなくスピーカーのメーカーまで指定しており、専門業者に外注すれば大赤字だろう。私も少しは音楽をやるので自前と借用の機材で会場の音響テストをしたが、結果は「不安」。札幌中のレンタル業者を探したら、普段はロックコンサートを手掛けているスタジオが格安で引き受けてくれた。

当日もう一つの問題が起きた。2人は悪天候の合間に運良く新千歳に着いたが、クラリネットのパヴェウさんは飛行機酔いと時差ぼけでダウン。私の車の中で死んだように寝入ってしまった。それでもリハーサル開始とともに復活したところはさすがプロ。彼らは楽器のほか数十種類の音響機材を持ち込み、スタジオが用意したスピーカーやミキサーと微妙な調整をしていく。彼らの細かなリクエストに応え、オペレーターさんが音作りをする、素人には不可能な、プロの業を見せてもらった瞬間だった。当初予算に外注費はなく最後まで迷ったが、本当に頼んで良かった。

コンサートでは、彼らは上映するそれぞれのポランスキー映画について「この作品は友情と犠牲に関

する物語だ。両方とも人生で手に入れるのは、とっても難しいね」というような簡単な解説を英語で

話してから演奏した。2人から「通訳抜きで」と言われていたのだが、お客さんにはどうだったろうか。

演奏は想像

以上に複雑。映画音楽を入れるだけでなく、すべての効果音を楽器と声で表現するのだ。例えば波の音を声で模倣し、それを特殊な機材で増幅し反復、そこにシーンに合った音楽を被せていく。20世紀初頭の無声映画のアイデアを基にはしているが、彼らは21世紀のアカースティックでハイテクなストリート・ミュージシャンといった形容がぴったりな気がする。彼らの醸し出すアングラな雰囲気と会場のライブ感。私は自分がポーランドにいるような錯覚を覚えるほどだった。シャザの2人も大満足。「とても知性の溢れる観客で、深い部分で理解してくれていることを身体で感じる事が出来た。いい思い出になった」と筆者に語ってくれた。

会場隣のハグマートがロビーでアルコールと軽食を出張販売。上映中の客席も真っ暗にせず出入り自由にした。ジャズライブの雰囲気を楽しんでもらう工夫だ。ワインとジャズとポランスキーはピッタリで、お客さんの盛り上がり方も例会とは違った。「今までの自分の映画という当たり前を180度違う感覚で観られて新しい発見でした。また観たい」というお客様からの声も寄せられた。

入場者数が80名で赤字決算となったのは残念かつ申し訳なかった。ジャズライブは初めてだったが、今後は企画の内容に応じて周知チャンネルを増やしていく努力も必要だ。

昨年のポーランド映画祭では初めて日本語字幕を付けた。今回はジャズ・コンサートとのコラボ。挑戦の1年だった。

(さみつ・しんいち) 事務局長



Sza/Za (シャ/ザ) 12月4日(火)  
札幌プラザ2・5にて



**速報!**Happy 25<sup>th</sup> Anniversary! 第4回 ポーランド訪問旅行

# 私をポーランドに連れてって!

ポーランドに精通した当協会スタッフと一緒に、満足が見える旅へ出発!  
民間交流親善大使として日本を紹介する企画にあなたも参画できます。  
さらに歴史ある街と世界遺産もたどります。10月19-24日(予定)



クラクフ旧市街地

わたしたちの協会の中心的な活動に、ポーランド旅行の企画があります。  
これまで1994年、1997年、2001年と3回にわたり会員のみなさまと一緒にポーランドを訪ね、豊かな自然や文化遺産に触れ、現地のポーランド方々との交流を深めてきました。最後の旅行からもう10年以上経っていますので、第4回のポーランド旅行の企画は、会にとって大きな宿題となっていました。  
今回、創立25周年という素晴らしい機会を利用して、その長年の宿題を果たしたいと思います。

しかも、今回は、これまでの3回とは違い、会員のみなさまにポーランドで日本文化を紹介していただくという企画を立てました。

公益財団法人「国際親善協会」が年に1回、世界の各都市で日本の伝統文化を紹介する「ジャパンウィーク」という催しを行っています。さまざまな才能を持った日本人が民間交流親善大使として現地に行って文化を紹介し、現地の市民と交流する企画です。これまで38回行われ、昨年はスペインのバレンシア市でした。それが、今年にはポーランドのポズナンで行われるそうです。「ジャパンウィーク」のツアーを企画している日本旅行の担当者の方と調整中です。「日本の伝統芸能の紹介」というと何か敷居が高い気がしますが、趣味のレベルでやってらっしゃる方がご自分の日頃の成果を現地の方に紹介するグループもたくさんあるので、気軽に参加して欲しいそうです。

当協会には、邦楽や生花、朗読など伝統文化に携っている方も多く、ピアニストもたくさんいらっしゃいます。そこで北海道ポーランド文化協会として「ジャパンウィーク」に参加することにしました。

また、「ジャパンウィーク」には参加せず、ポーランド旅行を楽しみたいという会員のみなさまも、もちろん大歓迎です。ポズナンのイベントは1日見学し、あとは協会で考案したお勧めのポーランド旅行コースを回っていただくと思います。ワルシャワ、クラクフの文化遺産、アウシュビッツ、シヨパンのゆかりの地など、訪れるべき場所は無数にあります。参加者のご希望にできるだけ沿った形で旅程を計画したいと思います。「歴史の旅」と「音楽の旅」という風に、2つのグループに分かれての行動も可能です。



ワルシャワ旧市街地

今回は、当協会の運営委員でワルシャワ音楽院に長く留学し、ポーランド語も堪能で土地勘もあるピアニストの安田文子さんも参加し、通常のパック旅行では味わえないポーランドの奥深さをご紹介できると思います。私もクラクフに2年留学していましたので、留学中によく行っていたお勧めスポットなどにお連れしたいと思います。

出発時期は現在10月19日札幌発、10月26日札幌着を予定しています。気になるお値段ですが、旅行会社には30万円前後で旅程を組んでいただく予定です。今回「ジャパン・ウィーク」のチラシを同封しますので、ご覧いただき、イベントへの参加、あるいはポーランド旅行への参加をお待ちしております。

ご興味のある方は、事務局・佐光までご連絡ください。また旅程に関するリクエストも大歓迎です。皆様のご参加お待ちしております。

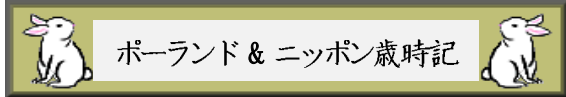
事務局 佐光 伸一(さみつ・しんいち)

お問い合わせ先

事務局メール [ssamitsu@hotmail.com](mailto:ssamitsu@hotmail.com) ☎FAX 011-790-8610 (佐光)ホームページからのメール <http://hokkaido-poland.com/>

郵送の場合 1ページ掲載の「発行」の住所へお願いします。

今後の活動予定



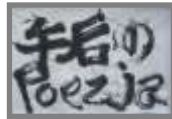
◆<第65回例会> ポーランド映画セレクションⅢ ◆

日時：6月8-9日(土-日)  
 場所：札幌プラザ2・5(狸小路5丁目)  
 マチェイ・ドレイガス監督(ウッチ国立映画大学)、  
 ヴィタ・ジェラケヴィチュテ監督(同上)、  
 久山 宏一(東京外国語大学)をゲストにお迎え  
 します。詳細は回封のフライヤーをご覧ください  
 き、お問い合わせのうえご参加ください!



◆<第66回例会> 朗読会「午後のポエジア」◆

日時：6月29日(土)  
 開演：午後2時(開場30分前)  
 場所：北大クラーク会館3F  
 国際文化交流活動室  
 ※ 詳細は4ページをご参照ください。  
 申し込み: 不要。直接会場へお越し下さい。



◆<第67回例会> パイプオルガンによる演奏 ◆

(仮題)「カチオルさん さよならコンサート」  
 日時：8月16日 午後  
 場所：北大クラーク会館講堂(予定)  
 カチオルさんへの感謝の気持ちをこめて、当協  
 会が「日本アレンスキー協会」と共催。詳細は追  
 ってお知らせします。どうぞお楽しみに!

新入会員のご紹介

坂田朋優さん、横田正樹さんが入会されました。  
 どうぞ宜しくお願ひ致します。(事務局)

会費納入に関する大切なお知らせ

(2012年10月~2013年9月分)

当会は皆様からの年会費のみで運営されています。  
 この度財政の見直しにより、今後は払込時の送金手数料  
 をご負担していただくことになりました。

(ゆうちょ銀行口座からATMによる振替は無料です)  
 ご理解のほど、よろしくお願ひいたします。

【郵便振替口座】02740-5-19735

北海道ポーランド文化協会

◆普通会員(年額) 3,000円 ◆維持会員(年1口)  
 5,000円 ◆学生会員(年額) 1,500円

蛇となり遊びせんとや初山河  
 (初山河「新年」)  
 兔汁スメルジャコフの臭して  
 (兔汁「三冬」)  
 ハルビンの街なつかしや蝦夷黄砂  
 (黄砂「三春」)

千代磨

<岩見沢市在住。霜田千代磨さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

吾が家の近くに教会があり、その裏には公園があります。よくそこで散歩をします。今回、突然もう春だということに驚かされました。つい最近まで、季節が変わる気配などまったくなかったのです。

実を結べ花散りばめし杏子の樹

wiśniowe pąki  
 na bezbronnej gałęzi  
 tak silne słońcem



czy wyda owoc?  
 obsypane kwiatami  
 drzewo moreli



Yōseki

無防備に陽浴びて強し桜の芽

<ボズナン市在住。ポーランド人女性 陽石さん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

## 北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 78 号 (2013 年 5 月)

## 目 次

佐光伸一〈第 65 回例会〉「ポーランド映画セレクションⅢ開催にあたって」、「素材を“映像詩”へとまとめ上げていくードルィガス監督」、「歴史に対する誠実さが伝わってくる—ジェラケヴィチュテ監督」、「ズバリ見所はココ！」……………	1
霜田千代麿〈第 66 回例会〉「朗読『午後のポエジア』について」[案内]……………	4
マリア・マグダレナ・カチョルさんの日誌、オルガンサマーナイトコンサート [2013.6.6]、オルガンによる教会音楽の夕べ [2013.6. 14]……………	5
安田文子〈第 63 回例会報告〉「21 世紀のショパン像～新書簡集出版を祝って」[2012.11.17] ……	6
塚本智宏「皆様へのご報告とお礼～コルチャック年 2012 札幌イベント開催、無事終了とその後について」[2012 コルチャック年特別記念企画—コルチャック先生の遺してくれたもの講演/展示会/映像上映/新刊書籍紹介 講演「子どもの発見と教育改革」、2012.11.20]……………	8
佐光伸一〈第 64 回例会報告〉「ジャズ de ポランスキー」[2012.12.4]……………	10
佐光伸一「第 4 回ポーランド訪問旅行～私をポーランドへ連れてって」[企画]……………	11
霜田千代麿・陽石 [津田モニカ]〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動予定：ポーランド映画セレクションⅢ、朗読会「午後のポエジア」、パイプオルガンによる演奏（仮題）「カチョルさん さよならコンサート」 / リア・マグダレナ・カチョルオルガンリサイタル with 松井亜樹、ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕 100 周年記念レクチャーコンサート、〈後援事業〉プロニスワフ・ピウスツ記念碑建立イベント……………	12